

フランチ・カフカ「アメリカ」

の構成と解釈

——特に「火夫」をめぐる——

藤 川 晴 男*

(昭和40年10月30日受理)

僕は今、高層デパートの屋上に昇っている。下まで降りるのにはエレベーターがあるが、普段足を使わないし、途中色んなものが見たいから、脚力養成と見聞を広めるため、時間をかけて原始的に歩いて降りよう。夢の中を歩いていては駄目だぞ、僕は自分に言いかけす。

屋根のある屋上の一室に、子供用の遊戯機械器具が並んでいる。小さい覗き窓が人待ち顔に黒く口を尖らせて放列をしいている。その下には台が並んでいて、その台座に足を乗せないと、子供の目は黒い覗き口にとどかない。台に乗れば、目が付く。思わず覗きたくなってしまう。こいつは親切と誘惑の台というものだ。十円入れる。すると、名所案内の掠れたバスガールの声や、おとぎ話の物語を四角い箱の中で聞き、同時に見ることが出来る。人から見えない秘密の内部を独り占めに我が物に出来る。子供は台の上で十円の優越感に浸れるという寸法だ。それは子供の心を唆すようにガーガー箱の中からぬけ出し、あたりに騒音をまき散らしていた。ボーリングがある。付添っている大人が子供をどけて占領している。何たることだ。パチンコは勿論ない。1・2台復活して置いたつて悪くはなかろうが、子供の夢はけちくさい大人の遊び道具には目もくれない。皆、模型の箱の中を動き廻る車の運転に走り寄つて、順番を待ちかねる盛況だ。

僕は壁ぎわの、ほの暗い隅に設けられたパノラマのボタンを押して、どれが一番ランプが多くつくか、試みてみたいと思つた。——これは昨今、僕がこのデパートの経営者に進言して、これから始めて実地公開に及ぶのである。

押し方によつて明りのつき工合が違つてくる。年令や経験によつて明りもまちまちに感度を示すという代物だ。結果として、押し手の精神年令が向うの暗い壁に自動的に大きく照しだされる仕掛になつている。こいつは子供をつれてくる大人のなぐさみものになるだろう、そう僕はサバをよんだ。経営者とは利益を折半する証文をとりつけた。ゆくゆくは全国のデパートにとり付けてやろう、という小手調べで特許だけはとつてある。

血液循環の原理に従つて、「血液」というボタンを押すと、横たわる人間の内部の血行に赤いネオンが細くすつと走つて灯る。怖ろしいガンの出来る部分は、「ガン」のボタンで明示される。こいつは一刻も早く切りとらなくてはならない。対症療法としては、早期発見しか手の施しようもない、という電光掲示が解答になつて出てくる。こんなものは常識であるから、単なる知識として精神年令のファクターにはならない。予備練習

* 外国語教室、講師

用のボタンとして端の方にくっ付いているだけだ。生きた人間の病状処理は自然科学の領分だ。もつとも最近のアメリカでは、どんな病人でも一応、先づ精神科の門をくぐってから、そこで区分けされ各分野に廻されるそう。病は気から、と古来我が国の漢方医はいみじくもおつしやつた。精神科の権威のある国は、それだけ文明の進み方も烈しいのだろう。ところで、精神分析などおつぱじめるつもりは毛頭ない。

パノラマには一個の人間が横たわっている。どうみても女ではない。近ずいてよくよく見ると、人間内部の器官がちやんと具つているようだ。離れて検すると、山のように黝々してこんもり森蔭があり、海岸の湾曲部にも一部分は見えるし、細部の家竝みもついているようだ。大した魅力もなく、それはそこに横たわっているではないか。既に死にたえているが、目は生きもののようである。じつと見凝めている。その目の中には、——カール・ロスマンが立つている。全体の雰囲気は明るい、どこか断崖に足をつき出して谷底をみているような目だ。誰かが横合いからカールを狙い打ちしているようだ。誰だ！ こいつは。黝々とした森蔭が上の方に漂つてその顔も定かに見分けられぬ。この横たわる人間はむき出しのままだが、自分の一切をみせつけているようで、自分自身の裁き人に自らがなっているのではないのか。晒されると人はパノラマを善意に、意味のある日常の具体物に当てはめてみようとするものだから、全体は山に見えてくる。それだけ一層得体の知れぬ怪物が長々と横になつていて趣を呈している。こいつはシニールぢやねえんか、ということになり勝ちだ。人の寄りつかない象徴の山のような形と見られるだけなのだが。これはまづい。僕は宗教家ではないし、それにお説教はにが手ときている。どこのボタンから押せばよい。ずらりと竝んでいるのだ。作品、そう——作品の第1頁からだ。作品は生きて僕の目に入る。

先づ、ボタンを一つ押してみよう、——「埠頭」。真暗だ。接触が悪いのか。いや、そうではないらしい。カチカチものはめ込みかえるような音が聞えてきた。細かなプラスチックの自動組立て機械装置を、僕はパノラマの台座一面にびつしりとうめ込んだのだ。その一つ一つに下から細いコードが結びつき張りめぐらして動くようになつている。スイッチが入つて、おびただしいこれ等プラスチックの片々が上下に気ぜわしく作動をはじめたらしい。

横たわっていた男の影がいつの間にか萎むようになくなり、入江とみえたあたりには、立像が浮び上り、一点、豆粒大の明りをその右手につけた。炬火を高^{たいまつ}く掲げているのである。左手には書物を開いて持つている。ブルックリンの摩天楼が入江をうすめ、ニューヨークと小さな掲示がうすぼんやり映つてきた。そう、自由の女神像だ。かちかち微かな音がなり続ける。目を細めると紋様をえがき揺れているように見えるのは、海の波だ。船は黒い。名前がないからだ、どうしたら浮び上つてきて動きだすか。パノラマがまだぼやけているぞ。ところで船は、波に絶えず少しでも揺振られているようでなくてはならん。

「K」のイニシャルのついたボタンを押すと、船が、それでも少しは揺れながら、奇妙な、つつかかるような物音をたてて見えはじめてきた。下船準備を整え、トランクや袋を担いだ乗客達——主にヨーロッパからの移民群らしい——が、降り口の欄干にびつしり立ち並び、新天地の土を一刻も早く踏みしめたい思いを顔一ぱいに浮べて、順番を

待ちあぐねているのだ。赤ランプがつき、主人公、カール・ロスマンが登場したことを示している。船は身じろぎをして、瞬間、ゆるやかな映画の動きを止めると同時に、ブザーが鳴った。——壁に字幕が打ちだされてきた。

Als Der Sechzehnjährige Karl Roßmann, der von seinen armen Eltern nach Amerika geschickt worden war, weil ihn ein Dienstmädchen verführt und ein Kind von ihm bekommen hatte, in dem schon langsam gewordenen Schiff in den Hafen von New York einfuhr, erblickte er die schon längst beobachtete Statue der Freiheitsgöttin wie in einem plötzlich stärker gewordenen Sonnenlicht. Ihr Arm mit dem Schwert ragte wie neuerdings empor, und um ihre Gestalt wehten die freien Lüfte.

独文だ。ここは日本のデパートの屋上の筈。僕は目を凝らしてあたりを窺った。と、既に例の覗き遊びの夾雑音もとぎれて響いてこず、密室に入った感じ。人一人居ない。子供の声も聞こえてはいないのだ。ただ、右上の暗い隅から目が光っているような気配がする。それは書き手の目かしら。カフカの目か？ 験しに僕はこの時、いたずらをしてやつた。計器盤の一番右隅の下段、即ち最後のオクラホマの「汽車」のボタンを、走り寄って押してみた。すると、どうだ！ 電流が通じたかとみる間に、計器盤の針が一勢にきぜわしくふれだし、台座が激しくぐらつき出したので、予測はしてここは強度のショック圧に耐えるよう念入りな細工はしておいたものの、僕はあわてて、横の電源をもぎとつた。

やれやれ、はじめから出なおしだ。試運転日だし、珍らしがつて見ていた子供等も、とうに表へ出て行つた頃だろう。経営者とは知人だから、表の扉は下ろしても、仕事がすみ次第上つてきて、成り行きを一部始終見守り、後楯になつてくれるものと判断した僕は、このつまづきを理由に、落ち着きをとりもどして気長にかまえることにした。

さて、僕は今、技師だ、と考えた。ロスマンも技師になりたがつていたな。そこで僕は、ふと考えをかせ、「技師」のボタンを押すことから始めにかかった。駄目だ。火夫くんに親しみをもちはじめたきつかけも、相手が技師だつたからではないか。無頼者のロビンソンとデレマルシュをふり切つて、ホテル・オクシデンタルのエレベーター・ボーイになつて励んだのも、それが云わば技師＝火夫の役柄の、幸にして転げ込んできたはまり役のためではなかつたのか。最後に、オクラホマ劇場の技師をたん希望はしてはねられはするが、辛うじて技術労務者に正式採用をみる——いずれも「僕の好きな」技師という職業ではないか。さつきのショックで機械装置に罅でも入つたのか。これ位で毀れるような設計はしていない筈である。うんともすんとも答えはない。明りはどこにもつかず、手答えさえないのだ。分つた。成程、「技師」はカフカの仕組んだ罠に違いないぞ！

さあ、よしきた。「K」をいきなり、押してやれ！ どうだ。見事に明りがつきおつた！ 先刻来中断した風景が、再現し、さわやかな風さえ加わつて生き生きと船は動き出し、心なしか船底を洗う波の音まで入りまじるようだ。

僕は、ボタンを次々に押してやる。

Dickens——Benjamin Franklin——Edgar Allan Poe——Ferdinand Kürnberger.

明りはつかず、代りに字幕が本文下に、ボタンに応じて浮び出す、一つ一つ別個に消えては現れている。

David Copperfield——Autobiography——The Narrative of Arthur Gordon Pym——Der Amerikamüde。

ディケンズのだけは他より明るく照射されたが、「アメリカ」の下敷きというだけで、齒の生えて生れでた鬼子の戯画が添えてあつた。が、計器盤のボタンの上に逆に明りがぼつんとついたままになつていたので、覗き込む。Arthur Holitscher という人名。ボタンを押し返す——下の字幕に、<Amerika——heute und morgen> (アメリカみて歩き)、1912年刊、という註まで小さく映つてみえる。そう、カフカはアメリカへ行つた経験はないぞ。さて、そう、ニューヨーク埠頭の写真を彼は机の前に立てかけ、じつとそれを見凝めているのだ。——暖められていたイメージとモチーフが決定的な重みを持ち、書き手の体から剝離してゆくだろう。原稿紙の中へおどり入らうとする一瞬の緊張。彼の心臓と頭脳を結びつける手から、ペン先を通してどの様な言葉の象徴がやがて結実し生み出されたか。先程来つている発端の大きな字幕に、光源が集中してきた。

16才。——無限の可能性と未来を約束する年令を冠頭に、30才になろうとする Kafka (1912年夏起草)は、自らの姓のイニシャルを主人公の名前に呼びもどしてき、Karl と書き刻んだ。だが、一人前の男 (ein Mann) になりたい。カフカはイロニーを含んだ思いをこめて、主人公の姓を Roß (馬)Mann と綴る。よろしい。16才の Karl Roßmann——29才の Franz Kafka。そう、俺の Kafka もチェッコ語で (鳥)。鳥男——馬男。Roß を強調して Mann を尾に生やしてやる。一人前になつてくれよ、と。Karl を見下ろす目は親しみにみち、既に諦観の趣きさえみえる。

16才のカールは、ニューヨーク埠頭に姿を現した。それは世界で一番新しいニューヨーク。船は「ゆつくりとなり」、陽の光が突然強まる。カール・ロスマンの目の中へ、新天地の入口に聳え立つリバティー・アイランドの自由像が、突然おどり込んでくる。陽の光にきらめくように (従つて作者は現実ここに訪づれない)、剣をもつ女神の腕 (実際はこれをもっていない) がたつた今振り上げたばかりのようだと思い、カールは一人感動してこれに目を凝らしている。剣は正義のシンボル。このアメリカは失われたパラダイスの約束の地。この樂園の入口で、天なる女の使者が怒りの武器を振り上げて立つ。黒い船が停る。「ずつと前から見えていた」のだが、この静止の一瞬、カールは彼の過去と未来を認識する——主観的に。

彼は自由の国へ到達した。古い色あせたヨーロッパから、自由の女神の炬火に寓意のこもる寛容の光を享受するために。然し彼はいきなりすぐ、自由の国の土を踏まない。彼は両親に「厄介ばらいされた」——罰として。正義の剣が、彼に道をさし示しているかのようだ。怒りの武器が、上陸寸前に、ニューヨークの埠頭に浮び上つたという事態——それは、つまり正義の領域から新世界の自由圏へ一足とびは出来にくいということを示している。彼が到着の瞬間に出会うただ一つの自由は、女神をめぐつて吹き漂う「気ままな爽やかな風」である。パノラマの燃える炬火が、烈しい響を残した時、剣にすげかわつたのである。剣を右手にしてこの自由像は、カールの行手に向い、一つながりの審理と試練の障害を約束づけるように一段ときらめき聳え立つように見える。

「女中」のボタンを意識的に押してやる。すると舞台は急に超現実化の様相を呈しはじめた。プラスチックの林が気ぜわしく作動を起し、小さな埠頭の無名船は、みるみるパノラマーぱいに膨れ上り、巨体を透徹らせて内部をさらけだしたのだ。一点、その奥に火が燃えしきついている。かまどに薪をくべる火らしく、時折かきたてられる火の反映に照らされて、その前に踞み込んでいる無口そうな大柄の女——腕に赤子を抱いている。女中の Johanna Brummer だが、船の底から、すき徹つた船全体を時折焦がす火どこの反映と、その火は奇妙な照応をするかのように瞬き合っているのであつた。

「K」のボタンを押しもどす。すると「女中」の火はなくなり、大きな字幕に応じてパノラマが移り動くようになる。立像・台座合せて高さ凡そ 100m に及ぶ女神像を眼前に、陽の当るデッキからカールは、「あんなに高いぞ！」と自分に向つて叫んでいる。他の乗客はそれにはまるで関心がない。下船の準備をし、舷側にたむろしてタラップを降りようとしているのだ。赤ランプを頭に光らせた主人公——舷側に押しやられているこのアウト・サイダー、の動きが活発になつてくる。

「トランク」のボタンを押してやる。と、肩に担ぎ上げていた赤ランプは、トランクを僕の方へ向け、その蓋を開いて一々みせるのだ。赤ランプは先づ豆聖書とレタアペエバアをつまみあげ、次に両親の写真をかざしてみせた。サラミ・ソーセージが端から覗き、少しばかり嚙つた歯形の跡がほの見える。洗面用具に時計、それに真新しい下着類。次いで上着——その内側の隠しポケットから彼は旅券をぬき出し、金をひき出した。つぎが当つている。それから二本の指で再び慎重に押し込みはじめる。最後にハンチングを片手にとるや高々と振りあげた——よく覚えといてくれよ、とでもいうかのように。順序が本文といずれも逆に入つていた。

同時に、手元のボタンに逆に又ランプが数ヶ所ついてきた。8つに区分けされたボタン群のなかのうち、第3群の終り「手紙」、第4群の初め「宿屋」、中程の「野宿」、第6群の端にある「門衛」のそれである。ボタンを押し返す。パノラマーぱいに透徹る船体のなかへ、紛失した傘とトランクが、>手紙<に乗つてふわりと中空に現れ、女神の茨のトゲ頭巾の上に静かに舞い下りてゆくのだ。——女神はすでに船体内部に吸収されて、ほら、小さくマストの位置に佇んで浮び上っているのである。そしてトランクの上には真新しいハンチングがのつかつている。そうだ、これから再び出発地点に舞い戻つたカールが、はじめて両親からの送りものをかぶり、一人だちの生存の旅路に出かけて行かねばならぬというわけだ。その先にたそがれを背景に姿を現したのは、道づれの二人の無頼者であろう。トランクの品物を野宿の場所へ引き抜いては放り投げている。両親の写真が裂かれて闇に散り、やがて見えなくなつた。船体の中央部——船長室とおぼしき傍らへ、>門衛<が大きな図体をゆらめかせて歩み寄り、いきなりカールのつぎの当つた背広を鷲掴みにすると、剝がしとり地べたに叩きつけた。ワイシャツのそでもとがひきちぎれる様を、僕は見逃がさなかつた。善意に充ちた好漢カールの不運は、こと毎に些細なことが原因で挫折の憂目をみなければならぬようだ。これでもかこれでもかとカフカは、さまざまに異る、だが根は一つの外的状況を構築しては、その真只中へカールを叩き込み驗しにかかろうと試みるのである。カールはもはや、ほとんど着のみ着のままホテルの門衛から放り出されるようにして立ち去つてゆく。勿論、ヨーロッパ退

去以来なじみのトランクなど、この時影も形もなくなっていたのであるが……

さあ、「トランク」の小道具はこれ位にしておこう。なじみの「K」を押しもどす。螢光のプラスチックは透き徹っている。船体の骨組だけはあらわに黒い枠をつけ浮び上っている。まるで迷路のような黒つぶい内部の枠。それはレントゲンに写し出された人体内部の均整な骨組みとは比べものにならず複雑錯綜しているのだ。小さな赤ランプがその間をぬい、廻遊しているではないか、——面白いように。どうしたのだ。……既に乗客のおびたしい頭上の足音と機関の最後のめいるような遠音しか聞こえなくなった船内の、「あとからあとから曲りくねった階段を通り、つぎつぎにつづく階段」を赤ランプは、紛失したトランクのありかを見失つてさ迷い歩き廻っているのだ。が、通路は行きどまりになり、赤ランプは困惑して立ちつくした。

行きどまりの袋小路で、カールは小さなドアをノックする。ドアの中でカールが見出した＜火夫＞は大男である。火夫は名もないドイツ船の名もないドイツのプロレタリアートだ。狭い部屋に押し込まれているベッド・棚・椅子と並んで、火夫は、「まるで貯蔵品同様に立つて」いる。船の小さな桟目のなかに貯蔵されているものみたいな感じがする。どこかの天窓からは、「船の上のほうでとうに使い古されたような光が、このみすばらしい船室へ陰気に射しこんで」いるだけだ。船底に近く方向をもたぬ、ぼやけた陰気にさし込む光の中へさ迷い込んだカールは、船の大きさに驚きながら、所持品を小さなトランクにつめ込む火夫を見凝めて入口に佇んでいる。と、やがて中へ入れられる、——暴力的に。

火夫は「いろいろな事情」で船をやめようとしているのだ。この陰気な Kabine から脱出しようとしている。ルーマニア人の 機関長に苦しめられ、とに角気に入らない。「お情けで給料をもらつて」いる。火夫と船とは違つて、このルーマニア人には名前がある——Schubal だ。「そんなことを言われて黙っている手はありません」。赤ランプが明滅する。赤ランプの点滅回数でカールの感情の揺れが測定できるのだ。カールは「船の不確かな床の上」にいる自身の位置を忘れるほど火夫の船室の居心地のよさを味う。が、やはり船体は少しづつ波の微動をうけ揺らめいているのである。カールの興奮に応ずるかのようだ。火夫の被っている社会的不正が、一人の若い理想主義者をプロテストにかりたてたわけだ。然し同時に、カールの怒りの中にかくれて、この怒りには女中の誘惑の余韻からはやく身をふり切ろうとする利己心が、ちらりと顔をのぞかせているようだ。で、不器用なけつたくその悪い鈍重な目の前の男が、女中ヨハンナと同じように火を扱う火夫だと知ると、火夫のベッドの中にもぐり込んでいた（引き込まれた女中の寝床に応じて）カールは、「まるでそのことがあらゆる期待を越えていたように」喜んで体を前へ乗り出すのである。再認識のショックといつてよかろうか。

カールはすぐさま船長のところへ赴き、権利を主張せよ、と火夫に促す。唐突である。が、カールにとって船長は、他ならぬ故郷に於て追放処分を下した父親の役割をおびて現れるのである。この若い小市民の息子の未熟さを、労働者傷害保険協会の公務員だったカフカは、皮肉な調子で火夫に答えさせる。——「まあ、出ていつてくれ。ここから出ていつてもらいたいな。ここにいてもらいたくないね。わしのいうことも聞いてないで、わしに忠告しようつてんだからな。わしが何で船長のとこへ行かなきやならないっ

てんだ！」火夫はこういって疲れて腰を下ろし、両手のなかに顔を埋めている。冷遇され、然も第一次大戦前の絶望にさいなまれているこの下級労働者の耳には、カールの向うみずな革命的行為への呼びかけは多分、むなしい声と響いたに違いない。この呼びかけは火夫には社会的同情どころか、ただカールの「事情」認識の不足にもとづいていると思われただけではないか。けれども世の不合理をカールはそのまま黙認することは出来ないのである。が、火夫にこう皮肉に拒絶され忠告をあだと解されては、そのまま火夫のベッドのなかで無くなつたトランクに再び想いををはしらせる以外にはない。それは故郷の両親を想うに等しいカールの帰らぬ夢の一部をかたちづくる。うとうとしかけた心地よい夢うつつのなかに、カールの夢は破られる。演奏し終つた船のバンドが狭い通路を通り過ぎて行つたからだ。カールはむつくり起き上る。それを潮時に、反射的にカールの意見に火夫は突然従おうと決心する。カールと共に部屋をでる。運命的な導きの糸に操られ、船長室をノックするのだ。

ここに於てカールの船長訪問は積極的な試みに転化してきたわけである。今やカールは火夫の弁護人の立場にたち、指導権を引き受けている。カールの胸は高鳴る。「船長室」の押しボタンによつて、プラスチックが作動を起し、船の外部枠は変形をうけずに、そこだけが膨らみせり出してくる。そこの3つの円窓から「波に身をうちまかせた」各種の船が、ゆらめきながら行き来する埠頭の風景が見える。軍艦の砲身、小型汽船やボート、巨船と巨船の間へすべり込んでゆく小舟、礼砲の音。その背景には、ニューヨークの摩天楼が聳えたち、何十万という窓の目でこちらのカールを見下ろしているのだ。彼は5日の航海の間絶えず海を見てすごしていた——夜はトランクに気を配りながらも。だが今はじめて、海の波を船長室の円窓から楽しそうな動きとして感じとる。このことは、＜火夫＞のエピソードとカールの＜女中＞との体験とを根本的に区別する要素であろう。カールは今や誘惑もされず、惑わされもしない。彼自身がイニシヤチブを握り、すべての責任を担っているのである。この抵抗しようとする人間の個人の力は弱いであろう。この際、体制側からはじかれ、云わば生存失格者と目される火夫に対する同情の底には、当然カール自身が同質的存在として、ただ一時的に弁護の役を引き受けているに過ぎない未熟さ、弱さを予想させる。然もカール個人は、トニオ・クレーゲルの内省に佇むことをせず、進んで状況の中へ身を投げてゆく。Johanna との出会い、カールの災難に相違なかつたが、船長室への訪づれば、今カールにとって第1にぶち当らねばならぬこの Roman の試練（Prüfung）になつてくる。僕は目を凝らして赤ランプの動きを見つめていた。

船長室では同時に二つの訴訟がもち上つている。一つは火夫自身に関係する。火夫は何故すぐカールの意見に素直に従おうとしなかつたのか、恐らく自分の不利を知つたに違いない。船長が登場する。彼ははじめのうちは、火夫の言い分を聞き分けて同感の意向を示していた。然し火夫は、要領を得ない自らの話に夢中になり、次第に自己の限界を踏み越えて全く思いもよらぬ地点にいる自分に気づくのである。カールとは有弁に心のたけを打ち明けてしやべりまくっていたのに、船長の前では混乱し、やがて火夫は沈黙してしまう。口を開いて出る文句は、被告の性格を露呈して、上役シェーバールの無能力を訴えるうらみがましい言葉だけなのである。この上役への不平は、ひいては

この上役を管理している船長の判断力を間接に疑うことにさえなりかねない。その結果、不利な立場に自らを追い込む失敗を転化し糊塗しようと、火夫は弁護人のカールに向つて八つ当りの罵倒を浴びせかけている。ところがこの時、当のシューバールが登場してくるのだ。「くつろいだこざつぱりした晴着を」きている。「Schubal」のボタンを押す。小さく本文下の字幕に >Schubiack< と映っている、——無頼漢の別称、ドイツのある地方では、人々の障害になる人間をこの名称で呼びならわす (Friedrich Kluge の語源辞典)、と。シューバールの登場で赤ランプは点滅の度をやや早める。不安の表情で船全体の螢光色に赤い余光が投げられている。シューバールは機関長の筈だが、「機械の仕事にたづさわつているとは思われない」服装をしている。彼は、みにくい頭をもちあげ粗暴な言辭を弄する火夫のような下層社会の人間にはどうしても見えないのだ。やがてカールの被弁護人は、「両脚をひらいて、膝は不安定であり、頭は少しばかり上げている。開いた口を通つて空気が出入りしていて、まるで胸のなかにはその空気をを使う肺がないかのように」戦意を失つた敗北の傷を額にうけたうちのめされ方で、沈黙の殻をつけた人間に失墜するのだ。

さて、被告>火夫<の裏がえしは、第6群「ロビンソンの場合」に於けるカールだ。第6群は第1群の対蹠点に立ち、カールは試練として第2番目に逢着する。最後は第8群——終章、「オクラホマ劇場」での文字通りの入社試験。この試験を辛うじてパスしたカールは、技術者として最低の肉体労務者に採用される関門で、云はば第三番目の試練にぶち当たるわけである。然しながら>火夫<の章は、他のカフカの作品群とは著しく趣を異にした、ほとんど唯一の例外といわねばならぬ。つまり他のカフカの主人公が何れも被告としての立場で登場するに反し、ここの主人公が弁護人であるという点である。

船長室に於ける第二の訴訟は、正義の原則に関するものだろう。ここではじめて、自由の女神像の手にする剣が光輝をましてカールの上にその影を落すのである。「失礼ですが、申しあげます」カールの弁護がはじまった。「ぼくの考えによりますと、あの火夫さんに不当な扱いが加えられたんです」。彼の友人は説明がまずく、カールは火夫に向つて警告せざるを得ない。「もつと簡単に話さなくちや。もつとはつきりわかるように。船長さんは、あんたがお話ししているようちやもつともとは思つて下さらないですよ」。更に自分に向けられた火夫の長広舌を避けようと骨折つている時にも、カールは、「あんたのいうことはもつともだ。正しい。ぼくはそれを疑つたことは一度だつてありませんとも」と自説を曲げる様子もない。そしてシューバールが入つてきて、一切がまづく思われだした時にも尙、カールは子供らしく依怙地になつて、「火夫とシューバールとの対立が、上級の法廷を前にしてあらわれるような効果を、この人びとを前にしてもきつとあらわさないではないだろう」という望みを固執し続けるのである。

ところで、この船長訪問はカールの被保護者の運命を決定づけたばかりではない。彼はそこで同時に、アメリカ上院議員の伯父にめぐりあつたのである。彼の運命からみれば全く思わぬ方向に、彼の足は向けられたのだ。上級の法廷——それは、彼にとつて神そのものの正義を意味しているであろうが——の怒りと寛容は、この伯父の出現によつて暖かみを添え、模糊としてにぶるかにみえてくるわけである。然もこの甥という有利な資格を意識しながら、カールは「なんでも思つたことをいつてもいいのだと考え」

て、火夫のために終りに近ずいた弁護を開始する。赤ランプの明滅は一段はげしく映ってきた。「これで火夫はどうなるでしょう？」上院議員は冷静に、ただ「火夫はあれにふさわしいようになるだろう」と言うだけである。赤ランプは興奮し、「正義に関する件に於ては、そんなことは問題じやありません」と、追求の手をゆるめないのだ。だが、この伯父は怒りに耐えて、未熟な甥に向い現実の論理 (die Logik der Wirklichkeit) を以て教え諭す、——「おそらく正義に関する問題であろうが、同時に規律の問題でもあるのだ。両方とも、そして殊に後者はここでは船長さんの判断にまかされているのだ」と。当の火夫は、ぶつぶつ咳きながらもうなずいてさえるのだ。船長の友人である伯父は、仕事の邪魔を謝して早く甥をここからつれ出さうと試みている。ロスマンは、これ以上官憲への抗議を続ける無益さにもはや思い当っているのである。

カールはこの訴訟に勝ち目のありそうに思えた時、ふと、「外国で立派な人たちを前にして善のために闘い、まだ勝利をもたらすまでにはいたっていないにしても、もう最後の征服の準備が完全にできているのを、彼の両親がもし見ることができたならば、なんといつたことだろう。両親は彼についての意見を修正するだろうか。自分たちの間に彼を坐らせて、ほめてくれるであろうか。彼等にとっても従順な彼の目のなかを一度は、見入るだろうか？」と夢想（何とその依存度の大きいことか！）をするわけであるが、今この成熟したいという欲求夢も、「立派な人たちの前」で萎みついていようとしているのだ。この両親に厄介ばらいされたカールが今、火夫の審理問題を船全体の支配人——父としての船長に報告に及び、火夫の不当な判決に抗議している、云わば比喩的には生みの父から受けた判決の不合理性に対するカールの反抗とおり重なる。同時に今、カールは上院議員、伯父の出現によつて、この船及び船長、更には彼の火夫から引き離されてしまうのである。もしカールがこの正義の訴訟に勝っていたなら、少くともカールの良心の内では、シェーバールや船長、ひいては生みの父親の不正を逆証する結果が生れるであろう。だが然し、この訴訟にカールは破れ去る結果、彼を追放した父親の企てが不思議に妥当性をとりもどし、ここに一貫性をもつて、女中 Johanna と火夫のエピソードが見事に構成上照応し、完成してくるのである。

「あんたは不当な扱いを受けているんですよ、この船のだれよりもね。それは僕もちやんと知っている。……でも、あんたは自分の身を守らなくちやいけない。イエスとノーとをはつきり言わねばならないんだ。そうでないと、皆んなには真相がかいもく分らないんだから」。

字幕に一際明るく、カールの最後の言葉が浮び現れ流れていった。火夫は額に皺をよせ言葉を探しあぐねている。カールは火夫の右手をバンドからとり出して最後の弁護をしながら、その指先を自分の指にからめもてあそんでいる。カフカの形象世界に於ける数少ない愛情の言葉に代るモチーフの一つ。指を触れあう硬質なプラスチックの摩擦音が、微かにカールの無言の愛と諦めを火夫に告知するかのように僕の耳をさし貫ぬく。女中 Johanna へはこうした愛のひとかけらも示すことのなかつたカールが、成熟した大人の認識を思わせる告別の言葉を、きらめきはじめた火夫のさまよう目に語り聞かせている。もはやこれは忠告でもなく弁護にもならない。カールは叔父の意見に従つて船を離れようとしているからだ。カールは最後にかくして、彼の善意の意図を完全に裏切

つたのだ、——二重の意味に於て。彼は絶望的な最後の抵抗をしながら、火夫の手にキスをする。「ひびだらけの、ほとんど血のかよっていないようなその手をとつて、まるで思い切らなければならない室のように、自分の両頬に押えつけ」る。彼がそれを離れた時、今まで点滅していた頭の赤ランプ（それは僕の錯視でなければ、マストに浮ぶ女神の燈台が投げかける光の照り返しであつた。カールの赤ランプは月——ランプに光源は入れておかなかつたのを僕は今思い出す）が消えかかつたかにみえた。船長室から出て行く途中の通路へ、シューバルの証人の群がどつと押し寄せてきたからだつた。

上院議員とカールは、短いタラップを降りて行く。下降の寸前、カールは「一番上の階段の上ではげしく泣きだす」。これはあながち若者の挫折の涙とばかりはいえまい。「……それはすべての人間の落度の根源である」。Kafka は後に、青年 Gustav Janouch (1903～) に向つて語りかける。「人間が見かけは手に入れにくく見える道徳的価値の代りに、誘惑され易い無価値なものを選ぶということは」。そして、この態度は根本的に人間に避けられないものかどうかという Janouch の問に対して、Kafka は激しく頭を振つてこう答える。「そうだ、人間はそれとは別な風には行動できないのだ。墮落（アダムとイヴの）は自由の証しである」。この言葉は又、Kafka が何故ニューヨーク埠頭の女神の手に正義の剣を握らせ、罪と自由とをこの像の中に結び合せたか、その理由を説明していると思うのである。

小さいボートがプラスチックの波に揺れ漂っている。本船の三つの窓のどの窓にも火夫の姿は見えず、代りにこちら側に顔を向けて、いつの間にかシューバルの証人達が蟻のようにびつしり窓を埋め尽くしている。そして去り行く二人に挨拶を送り、伯父までが礼を返してさえているではないか。カールはこれをみて驚く。伯父の膝に膝頭を合せてボートの中に窮屈そうに坐るカールの心の目に、「この人がいつかあの火夫の代りになることができるだろうか」という疑いが、最後に又兆すのである。こうした切りさかれるような主人公カールの氣息のなかには、彼をつき放すべく彼を愛している人々——この伯父やホテルの女給頭やテレゼ等がかもす状況を、やがては彼も亦捨て去らねばならぬだろうという暗示が働いているのだ。——彼の両親がはじめに彼に行つたと同じように、益々それは段階を追つて状況を悪化させながらやつてくることになるだろう。

僕は、残しておいた第1群最後のボタンを押しにかかろう、——「階段」なのだ。カールのボートが波間に消え去つた後、ボタンを押すや、林立して透徹る螢光プラスチックの片々が構成する全パノラマを蔽つた船体内部の、舳先から艫にかけ順を追つて、階段状の層が目の前に気ぜわしい音を響かせ急速に展開をはじめ、つくり上げられてゆく。……ニューヨークの街中の伯父の持つビルデング。ビルの谷間から真直ぐ国道が一段下を走り、そこを一定の間隔でつつ走る自動車の犇めき合い。更に一段下の国道筋を三人の男が歩いている、トランクを担いだ赤ランプを中にして。すると、デラックスなホテルがその下に出現。エレベーターが赤ランプを乗せて上下運動を繰返している、船底に着くと又上つてくる。スラム街の穴倉がその底辺に小さく落ち窪んでみえる。目を近づけると、テラスに米粒程の女がのぞき眼鏡を当てているのであろう、上を窺っているのが看取される。然しやがて、艫の基底部から暗黒のなかへ赤ランプは失墜したように消え去つた。驚いたことにそう思つた矢先、赤ランプは波間をくぐりぬけて、船の甲板

に再び姿を見せた。

彼は、一枚の紙片を携えて現れた。僕は、彼の手からそれをぬきとつて椅子から立ち上り、暗くなりかかつてきた隅の窓明りで読みとつた。それにはこう書いてあつた。——「もしあなた方が、カフカが展開しているテーマや彼がその書物のなかで提出している問題を分析によつて枚挙するならば、そして、もしそれについて彼の生涯のはじめを追想しつつ、それらが彼にとってあつかうべきテーマであり、提出すべき問題であつたと考えるならば、あなた方はびつくりさせられることだろう。しかしそんなふうには彼をとらえるべきではない。

カフカの作品は、中欧のユダヤ・キリスト教的世界への自由な一元論的反応である。彼の小説は、彼の握手や彼の微笑やマックス・ブロートがあればほど讀んでいた眠さしもまたそうであつたように、人間としての、ユダヤ人としての、チェコ人としての、強情な婚約者としての、結核病者としてなどなどの彼の状況の総合的乗り超えである。批評家の分析を受けると、彼の小説はもろもろの問題にくずれる。だが批評家は間違っているものであり、彼の小説は動きのなかで読まなければならないのだ（サルトル：「文学とは何か」）。

成程、批評家は分析をやらかすからな、批評家は間違っているとな、文学は分らないというのと同じことだ。僕はしばらく窓あかりで幾度もこの紙片の内容を読みかえした。カフカの作品は反復を強いる、結末がない、常の小説が終つているところから始まつて、結末から再び楕円の軌跡を 画きながら、発端へ吾々をつれもどす。逆算すれば第一章「火夫」は「失綜者」（普通「アメリカ」）全体の原型であり、各章は、状況設定を変えた同一テーマの反復図式といつてよく、本質的に一定しているのだ。人生そのものと同じく、長篇が何れも未完である所以の一端もそこにかくされていようか。カールが持参したサルトルの文面のなかで、僕は、「カフカ」と「彼」の双方の個所を「私」にすべて変更統一して、再び頭から読み直している自分に気付いた。

僕は、静かに心ひそめてわが愛器の前にもどつて行きながら、考えていた。はじめに「汽車」のボタンを押した時、台座がはげしく揺れたのは、僕の装置に間違いがなければ、多分作品のどこかに（それは終章の「オクラホマ劇場」に違いない）無理があるからだろう。それにしてもあの地響きはただごとではないし、明りも最も多く一瞬またたき連つて発火するほどに思われたぞ。然し、一番調和のとれたつき工合といえ、それは最後に押した「階段」のボタンの時であつた。何故なら、僕のパノラマの構造図式はこの考え方に基づいて造られていたからだ。アメリカ資本主義の社会的機構の各細部を据えつけて、カフカ作品の中で最も社会的要素の濃いこの作品の背景にし、「人間疎外」という問題をも加味しようかと試みてみたが、無駄な労力をこの際避けねばならなかつた。第1に金がかかりそうだし、時間も切迫していた。それにカールの心の動きを、原型ともいうべき「火夫」の章に限定して捉えてみたためもある。サルトルの忠告を俟つまでもなく、固定した僕のパノラマ自身に欠陥があるためか、精神年齢測定機能は、はじめの意図に反して麻痺したように作動を起さなかつた。嗚呼。

だが、おびただしい計器盤に接続するコードと、コード相互間の主要な配線回路は、しばらく台座下部にこのまま取りはずさずに据付けておこうと思つた。僕は電源を切つた。

するとパノラマには変じて一個の人間が横たわっている。既に死にたえているようだが、目は生きもののようである。じつと見凝めているのだ。その目の中には——Franz Kafkaが、あの独特の微笑をもらして立っていた。

そう思つた時、靴の足音がした。足音は、ぐつたりして佇ちつくす僕の傍で止つた。それは僕の後肩を一つポンと叩いた。経営者だつた。

「どうだい？ うまく出来ましたかね」

彼は尋ねかけてきた。暗くなりかけた屋上の一室に現れた長身の彼の瞳はきらめいて見えた。透んだこの作者の目を想像して、僕は思わずみかえした。

「いや、どうもそれがさ、精神年令がでなくてね、とてもまだまだ手間がかかりそうなのだ。それはそうと、あなたのとこの、このELプラスチックはたしかにすばらしい。透明のなかに別の像を二重映しに出来るんですからね、それだけで大成功ですよ。いや、助かりました……」

僕は自分なり気の解釈をほどこし与えた愛器が、図式的に写しだした展開のあとを目の前に思い浮べながら、ELプラスチックの性能に改めて感謝し弁解した。

「そうでしょうな、まだ試作の段階ですからね、無理もない。精神年令など今更らば何になるのですか。そんなものは必要ないですよ。働くことですな、年令を忘れて。ただアイディアは、どこに於ても大切ですからね、これだけは……」

彼は煙草をとりだしてライターをつけ、まるで模型のことには無関心な様子で一服すると、上体をそらすようにして話しを続けようとした。

「待つて下さい。明りを入れましょう」

僕はそう言つて、電源をさし込み、「K」のボタンを押した。埠頭の風景が現れ、船が近寄り移つてきた。

「何ですか、このパノラマは？ 赤ランプがついていますね」

「ええ、そこなんだ、精神的なものの表徴なんです。これが内部に目をもつていて、動き廻ると外界がショックで変容する、姿が変わるのです。『K』のボタンと僕はいつているのですが」

僕は少し誇張して説明した。

「ほう、それが年令とどう関係があるのです？ 君は技師でしょう、正確な技術で要求に応じてもらわなくては困りますな！」

彼は何の役にも立たない代物を、代物を、とぶつぶつ言い出した。そして「閉店時間はとうに過ぎましたよ」不平がましくなり出した彼は、こうつけ加えることを怠らなかつた。

「ええ、それはそうだが、僕は、この作品の図式の操作がうまく出来る人間は、世の中のからくりをよく心得て、判断もたしかだろうし、精神年令も高かろう、とまあ考えてみたわけですが、どうやら、失敗だつたようです、その点は」

「何故ですか」

彼はのり出してきた。

「はじめ、何をつくつてもよいとおつしやいましたので、作品にELを利用させてもらいました。やっているうち、年令のことは後で改めて考えなおすことにしたのです。

それが失敗だつたのは、この人の作品を、ある一つの像や、ある一つの立場からして解釈しなければならないと考えること自体、この人に対するさまざまな誤解を生む原因であるからです。いや、無理解といつてよろしい。ですから、裏をかえせば、何とでも解釈できるようなものを精神年齢の対象装置に選んだこと自体、間違っていたのでしょね」

「なる程、一体何者です？ これは」

彼は引き込まれてきた。

「そう、誰かも言っているようですが、人間存在そのものをあらわす象形文字なのですよ」

「それは、危険だ」

そう経営者は咳くと、手にしていた煙草の火の先を、プラスチック盤の片隅の一片に押しつけた。プラスチックの林は次々に燃え移つて、ジュツという音を間歇的にたて続けながら、塩を振りかけたナメクジの融け去るように消えた。

踞つてコードの絡まり合う残骸を、僕はその下から丁寧に拾い集めてバックに押し込んでいた。すると、上から声が、暗闇から落ちてきた。

「ELプラスチックは貴重品です。この損失は君のツケにしておこう。精神年齢がうまいとこいかなければ、このツケはその折に返してもらうことにしようではないかね」

まだ指に粘り付いて、ほとぼりの冷めやらぬ纏れたコードを、僕はしまい込んだ。

「よろしい、やれるだけやつてみましょう」

経営者より一足先に、こう言い終ると起ち上つて、僕はデパートの階段を下りはじめた。——どこまでこれから先、墮落^{おち}てゆくだろうか、とふと考えながら。

Zusammenfassung

Das Konstruktionsschema und die Interpretation von Kafkas Roman „Amerika“

—mit besonderer Rücksicht auf den >Heizer<

Haruo FUJIKAWA

(Fremdsprache Abteilung, Fakultät für Ingenieurkunst)

Entschluß, das Manuskript zum Druck zu geben (1913), deutet darauf hin, daß Kafka die Hoffnung, den Roman als Ganzes zu beenden, schon früh aufgegeben hat. Kafka behandelt den >Heizer<, wie er später die Parabel >Vor dem Gesetz< behandeln sollte.

Nun das unwirkliche Schwert dieser Freiheit vom Anfang dieses Romans ist nicht gegen das soziale Unrecht gezückt, das der Kapitalismus Amerikas ausgebrütet hat. Es richtet sich gegen das Gewissen Karl Roßmanns. Im Büro des Kapitäns finden gleichzeitig zwei Prozesse statt. Der eine betrifft den Heizer und geht schließlich verloren, obgleich der Kapitän der Sache anfänglich beträchtliche Sympathie entgegenbringt. Der andere Prozeß betrifft den Grundsatz der Gerechtigkeit. (Wir befinden uns immer noch an Brod des Dampfers, und der Schatten des Schwertes in der Hand der Freiheitsstatue fällt immer noch über die Szene.) Als Karl den Prozeß aber schließlich verlor, scheint der krasse Entschluß seines Vaters, ihn verbannt zu haben, gerechtfertigt. Im vollen Doppelsinn verrät das unerwartete Erscheinen seines Onkels hier Karls guten Absichten. Damit vollendet sich der Parallelismus der Johanna- und der Heizerepisode.

Den finalen Prozeß aufgegeben, mit dem Senator steigt Karl die kurze Treppe hinab. *Dieses Hinabsteigen* ist gleichfalls für Karls künftiges Schicksal symptomatisch: aus der Höhe des Zimmers, das ihm Onkel Jakob in seinem Stadthaus eingerichtet hat, wird er wieder zur Landstraße niederstürzen; die Gesellschaft eines amerikanischen Senators und seiner Geschäftsfreunde wird er verlassen und sich mit den Vagabunden Robinson und Delamarche gemein machen; aus der Höhe des Hotel Occidental, das er als Liftjunge bis unters Dach befährt, wird er in die Schluchten der Slums geraten, wo ihn die Polizisten jagen; der freigebigen Oberköchin und der zarten Therese wird er entsagen, um sich mit dem monströsen Fleischhaufen Brunelda zu verbünden.

So deutlich ist diese Abwärts-Bewegung als Konstruktionsschema des Roman >Amerika< vorgegeben.